

隅田川口改良工事竣工に際して

工學博士 丹 羽 鋤 彦

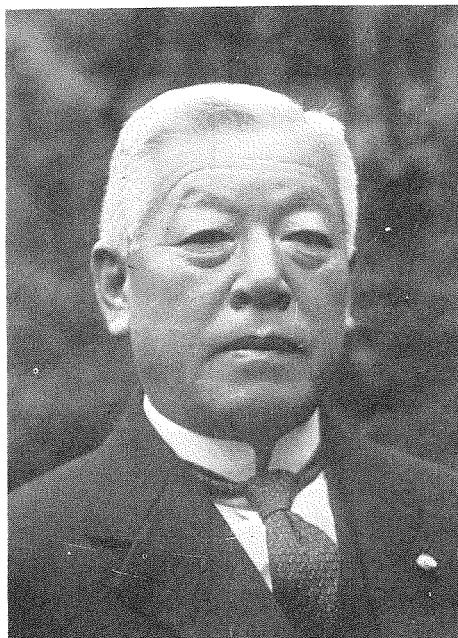
東京築港の議は明治13年東京市區取調局に於て、市區の規模は港を基礎として決定を要するとの意見より起り、種々調査せられたが、其の具體的計畫は明治33年吉市公威中山秀三郎兩博士の提案を嚆矢とす。此設計は横濱港との關係から經濟上色々議論はあつたが、當時市會議長の星亨氏が熱心に其の必要を主張せられ、形勢好轉實行の緒に就かんとせし折柄星氏の凶變に依り頓挫し、爾來東京市に於て引續き調査を續行せしが、尾崎市長時代河港課長たりし直木倫太郎博士の提案に依り實施せられた隅田川口改良工事こそ今回竣工した改良工事の第一歩であり、同時に大築港計畫の一部となり、其の前驅となつたものである。同博士は其の後第二期改良工事を起し、又坂谷市長時代に築港計畫案を提出せられたが、同市長は熱心なる築港論者であり、極力に其の成立に努力せられしが、不幸實行の運到らずして了つた。次に田尻市長も亦築港達成の必要を認め且つ市會建議の趣旨に依り時勢に應ずる大規模の計畫立案を技師田村興吉氏に命ぜられ、政府關係權威者の參加をも得て決定發表されたものは所謂35,000萬圓の大計畫にして、當時横濱市民の心膽を寒かくらしめたものである。夫れから後藤市長時代に私は職を東京市に奉じ、直接此問題に關與

することとなり、永田市長時代まで引續き從事したのである。

元來京濱兩港は密接なる關係を有し、横濱港出入貨物の大部分は東京の貨物である。然るに東京港修築の着手が遅れた爲め、横濱港には既に大規模の改良が施行せられたから、更に横濱港の存在を無視する如き大々的設備を東京に實現せしむることは國家經濟上よりも考へねばならぬし、横濱市が猛烈なる反対運動をすることも亦諒とせねばならぬ問題と思ひ、當時主管助役たりし池田宏氏と相談して此35,000萬圓案を再検討することなし、差當り必要な第三期隅田川口改良工事

に着手することにしたが、是は今回竣工したものゝ前身である。而して東京築港案に對しては現状に鑑み、京濱兩港各其特色を發揮して共存共榮の途を得る方策を調査した。

當時荒川改修の竣工に依り、隅田川口水深維持の見込も立ち、又直木博士の立案せられた河口改良工事も數回追加擴張せられた結果、水深25尺位までの航路なれば餘り大なる工費を要せずして出来る見込が付いたから、羽田に港門を設ける大計畫は將來に譲り、品川臺場以南既設の航路を改修擴張し、臺場以北海面を整理して内港とする案を立てたのである。



此案は旅客船や大型貨物船を除外し、中小型貨物船の出入に便宜を與へ水深の關係から最大6,000噸位までを收容する計畫にして、横濱港は世界的航路の樞要寄港地として榮え、東京港は近海航路の終端港として榮えしめんとするものであるから、横濱に對し相當の影響あるべきも致命的打撃を與へないことを期したのである。此案は永田市長時代具體的に發表せられ、關東大震災の爲め一時行惱となりしが、其後歴代の市長や關係局課長諸氏も幸に此方針を持続せられ、第二次永田市長時代に東京築港案として政府の認可を得、目下工事進行中であるのは誠に満足に思ふ次第である。

從來中繼港たるに安んじ其の地位を維持せんが爲め東京築港に反対せし横濱に對し、近時一大福音を齎したるは神奈川、鶴見、川崎方面に勃興せし工場地帶の大發展であり、茲に横濱港固有の大量貨物集散地を得たことである。商工業の中心地たる東京港の改良は經濟上當然の結果にして、其の實現は單に時期の問題であるから、其の場合横濱港に甚大なる打撃を與ふることを恐れて居たが、今や此工場地帶の發展と水深の關係に基く大型船の獨占に依り、横濱港は東京港と竝立てて充分獨立し得ることになつたから、横濱港の前途は専ら此方面的勢力發展に努力して自港の繁榮を期すべきであり、一般の利益を無視してまでも東京港の施設を阻止すべきではないと思はれる。

然るに東京港に於ける臨港鐵道や繫船設備に對し、横濱市が反対を唱へ無理に東京の海陸連絡を不便ならしめ、東京港の取引範圍に屬する後方地域貨物をも無理に横濱港を經由せしめんとするが如きは、單に横濱港中繼貨物の減退を防がん爲め、一般の利益を無視するものにして、餘り利己的の主張であると認めらるゝも亦已むを得ざるべく、公益の爲め注意すべき事柄である。

現在の東京港は内國貨物だけを扱ひ、外國

貿易の貨物は横濱港を經由することになつて居るが、將來此現状を維持することは困難である。唯今は種々の事情から外國貿易貨物を取扱はず不開港の儘になつて居るが、是は一時的のことと經濟上早晩東京開港の必要を認めねばならぬ時期の來ることは當然であるから、横濱も豫め其の覺悟をして居らねばならぬと思ふ。其の場合京濱兩港の相違は設備關係に於ては大型船と中小型船との差があり、旅客船と貨物船との別があり、又貿易關係に於ては横濱は對歐米を主眼とし、東京は支那南洋等近海諸邦を目標とすることになると考へられるから、今後港内設備の改良も是に順應して施行することが肝要であると思ふ。但し將來東京を開港とするにしても、地形上の不利、工事の難易をも顧みず、直に横濱と同一程度のものを造るは國家經濟上不利益であり、避くべきことである。要するに將來規模の問題は港勢發達の狀況に應じ、按配すべきであるが、兎に角兩港間には常に相當の差別が残さるべきであると思ふ。

以上は大體を述べたものであるが、今日近接せる大阪神戸兩港が竝立てて愈發展の途上にあるが如く、京濱兩港も各其の特質に鑑み、適切なる改良を爲し、共存共榮の趣旨を誤らず、有無相補ひ互助互惠の誠意を以て相提携し、徒に排他的無謀の大計畫を夢想せず、眞面目に實行策を考慮せられんことを希望して此稿を終る。

編者附記

東京港と横濱港の修築に深き關係を有せられ、前後三十數年の長きに涉つて兩港に對し格別の關心を持たれ、各々の個性とも云ふべきとの最もよく理解されてゐる丹羽先生の、國家的見地より論ぜらるゝ御説は、まさに、この近接せる二つの港の將來に對して、貴重なる指針を與へられたものと云ふべきです。まつたく斯くの如くしてのみ東京及横濱兩港の平行的發展が期せらるゝであります。